
天気予想

名無 ゆかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天気予想

【Nコード】

N0459U

【作者名】

名無 ゆかり

【あらすじ】

水沢弘樹はある雨の日に見知らぬ男に出会った。

弘樹は全く記憶にないが、男は弘樹を知っていると云う。弘樹自身も自分を知っているはずだと。

「俺の事覚えてねえんだ？」

1・戸惑いと雨

「水沢……？」

その日は酷く雨が降っていた。

道路の水溜りの上を走って行く車の音がそこらかしこから聞こえる。
みずさわ 水沢

ひろき 弘樹はコンビニの前の自動ドアの横で地面を見ながらタバコをふかしているとどこか聞き覚えのある声に呼ばれて顔をあげた。

「お前、水沢か？」

目の前にいつのまにか男が立っていた。

いかにも高そうなスーツに身を包んだ男は弘樹と身長は大差ないが、わりと整った顔立ちをしていた。

「……そうだけど。あんた誰」

知らない男の顔に弘樹が訝しげに言うと男は一瞬顔を硬直させた。

そして、その一瞬あとくつと笑いをもらした。

「ハッ！ 俺の事なんて覚えてなえのかよお前」

「はあ？ だから誰なんだよお前」

弘樹が睨むと男は端正な男らしい顔から表情を消した。

「フーン……ホントに俺の事覚えてねえんだ？」

男は自分の短いサラサラの髪が弘樹の顔にかかるほど顔を寄せる。

「な……！ 何なんだよお前っ！」

弘樹は驚きと気味の悪さに男を突き飛ばした。

男はよろけながら数歩さがって、また笑いをもらしだす。

暫くすると笑の引っ込んだらしい男は別段興味もなさそうな表情で

弘樹を見た。

「水沢、お前こんな所でなにしてんだよ？」

「……別に。あんたには関係ねえたろ」

「ま、そりゃそうだな」

「ていうか、もうどっか行けよお前」

弘樹が睨むと、男は気にも止めない様子で笑う。

その様子に弘樹はもう一度、今度はさらにきつく男を睨んだ。

「わかったよ。んじゃあな」

男はあっけからんと言つと、くるりと弘樹に背を向けた。

しかし、思いついたように持っていた鞆からタオルを取り出すとおもむろに弘樹に投げて横した。

「それ、やるよ」

「は？」

「お前ビショビショだろ」

弘樹が混乱していると男は今度こそ本当に弘樹に背を向けた。

「んじゃ、またな。水沢」

「は？ またつて……」

ヒラヒラと手を降る男を、弘樹は渡されたタオルを手に啞然と見送ったのだった。

「は……くしゅっ」

弘樹はずずつと鼻をすすつて溜息をついた。

昨日雨にうたれていたせいでどうやら風邪をひいたらしい。

ボーっとする頭を押さえながら弘樹はリビングのソファにドカリと腰をおろして、テレビをつけた。

暫くして、弘樹がうとうとしかけていると廊下からリビングへ続くドアがガチャリと開いた。

「ただいまあ。あ！ヒロまたそんな所で寝るなよ。風邪酷くなるぞ」

「うつせえぞ、歩。^{あゆむ}頭に響くだろ」

「だったらちゃんとベットで寝なよ」

何回も言わせないでよと歩むが不貞腐れたように言った。

歩は弘樹の母方の従兄弟で、同居人だ。

今は美容師をしていて今日は勤務先の美容室が休みのため会社を休んだ弘樹の面倒をみているのだ。

歩は両手に持ったスーパーの袋をテーブルにどかりと置くと中身を冷蔵庫に移し始めた。

「歩ー、アイス買ってきたかー？」

「そう言うだろうと思って買ってきといたよ」

「さすが歩」

弘樹は重い体を叱咤して立ち上がらせると嬉々として台所へ向かった。

「お、これこれ」

ヒョイと歩の手から某アイスのバニラ味を取ると、弘樹はさっさとソファアへ戻った。

「本当好きだね。それ」

「まあな」

弘樹はカップの蓋を開けて木のスプーンでアイスをほじくると一口ほうばった。

「あ、そういえばヒロ昨日美嘉の所行ったでしょ」

「ん？ ああ」

スプーンを咥えたまま弘樹は気のない返事をした。

「俺、今日行って来たんだけど美嘉がゼリーありがとうって言うといっていった」

「ふーん」

やはり気のない返事で弘樹がつぶやく様に言うとは背後でボタンと冷

蔵庫の閉まる音がした。

「ヒロさあ…なんで昨日あんなに濡れて帰ってきたの？」

「それは傘忘れたから……」

「傘なんてコンビニで買えば済むでしょ？ 最初は小降りだったんだし。それに病院の売店にだって売ってるし」

「それは……」

弘樹が言葉に詰まると歩は一つ大きく溜息をついた。

そして、キッチンから出てくるとソファ―に座る弘樹の前まで来て顔を覗き込んでくる。

「美嘉と、なんかあった？」

「……なんも」

顔をふいて弘樹はアイスの最後の一口を口に放り込むと早々に席を立った。

「俺、ちよつと寝てくる」

「ヒロ……」

背後で歩が呼び止めるように呟いたのが分かったが弘樹はそれを無視して廊下へと続く扉を開いて自室へと戻った。

朝起きるとまだ多少頭痛がしたが会社に行けないほどではなさそうだった。

弘樹はベットから抜け出すと自室のななめ向いにある洗面所へと向う。

ざつと顔を洗って歯を磨くと弘樹は軽くシャワーを浴びようと服を脱ぎだす。

そこで、ふとバスタオルやハンドタオルなどのタオルがおかれている棚に目が止まった。

（そう言えば……）

棚のに置かれたタオルの中に見慣れないタオルを見つけて弘樹はあの雨の中会った奇妙な男の事を思い出した。

「あいつ、何だったんだろ……」

『ほんとに俺の事覚えてねえんだ？』

男の言葉を思い出し、考えてみるがまったく心当たりがない。

（まあ、いいか。）

「ヒロ〜、朝ごはんパンかごはんどっちがいい？」

ひよこつと顔を覗かせた歩に弘樹は「ごはん」と簡潔にかえすとさっさと風呂場へ入った。

2・昼時ココロは曇りがち

「あのさ、そんなに俺の顔見てなんか楽しいのか？」

キーボードを叩く手を止めて弘樹は溜息をついた。

お昼前の1番忙しい時間帯のオフィスの一角。

横目で右隣をチラリと見るとニコニコと満面の笑みが視界に入った。

「ん？ 楽しいに決まってるじゃん？」

「決まってるのか……」

弘樹はもう一度諦めたように溜息をつく。

すると、隣のデスクの香坂（こうざか）圭介（けいすけ）はニヤリと笑ってスッと弘樹の耳

元に近寄ってきた。

「だって俺、弘樹のこと愛してるし」

「なっ！ おいつ！ お前は会社でなんつーこというんだっ！」

ぱつと圭介の口を塞いで慌てて周りを見回す。

「誰もきいてねえよ。ただでさえ今忙しいんだし」

「あのなあ」

そう言う問題じゃねえだろと言いかけたとき、「水沢、ちょっとこ

い」と係長に呼ばれて弘樹は渋々と席を立った。

「覚えてろよ」

去り際小声で呟いて圭介を軽く睨んでおいた。

？

「ひーろきっ！ 一緒にメシ行こうぜ？」

「嫌だ。」

即答して弘樹は圭介の横をすりぬけた。

ビルを出て、まだ暑い残暑の中弘樹は近くのラーメン屋で冷やし中

華でも食べようと歩いていた。

「なんでだよ？ いいじゃん別に」

「嫌だっつってんだろ。鬱陶しいぞ圭介」

弘樹は心底嫌そうに顔を歪める。

「ひでーなあ、ヒロちゃんはー」

「ヒロちゃん言うな。大体お前わざとらしいんだよ。どうせここまで来たら俺がどう言っても来るんだろーが」

「まあねー」

楽しそうに笑う圭介を横目に弘樹は憂鬱な気分のまま残暑のように鬱陶しい男に溜息をついた。

昼ぐらいゆつくりしたい。

「あのさ、お前なんでそんなに俺の事好きなわけ？」

「え？」

「いくら幼馴染だからって、そんなに好かれることした覚えねえし、男だぞ俺は」

圭介とは小学校に入った6才のころから腐れ縁で、もう知り合って19年になる。

「ん？」

圭介はいかにも女子受けしそうな甘いマスクを少し考えるように傾けた。

「好きだから？」

「はあ？ 答えになってねえぞ」

「だって理由なんてねえしなあ」

さらりと言うと、圭介はにっと笑った。

「ま、弘樹が男に興味ないの知ってるし。無理やり襲ったりはしないよ」

「男に興味あつたら襲うのか？お前は」

「さあ？」

冗談なのか、本気なのか。

どっちにしる怖いので弘樹はそれ以上つまらないことにした。

弘樹が向かったのは行きつけのラーメン屋である 龍心 だった。

「お、相変わらず金魚の糞がくつついてるみたいだな、ヒ口坊」

暖簾を潜ると、見知った顔をカウンターの向こうに見つけた。

「あぁん！？ 誰が金魚の糞だよ糞ジジイっ！」

弘樹の後ろであとから不機嫌そうに暖簾を潜った圭介がうつてかわった荒っぽい口調で怒鳴るように言った。

昼時で多少混んでいる店内の客が数人分振り向くが、常連客ばかりなので皆またかと直ぐに視線をそらした。

「お？ 今時の糞は喋るのか。便利な世の中になったもんだなあ」

「んなわけあるかよ！ 糞言っんじゃねえ！」

「おい、昼時に糞糞つて連呼すんじゃねえよ。」

「お前が言っただろ！」

圭介と、この店の店長であり弘樹と圭介の高校からの馴染みである
藤崎 孝一は顔を合わせて早々に弾丸のような罵り合いを始めた。
ふじさき こういち

「孝一さん、冷やし中華2つ。圭介もそれでいいんだよね？」

「うえ？ あ、ああ。うん。」

「冷やし二つな。了解」

圭介が戸惑って頷くのを横目に何事もなかったように孝一は軽く言う
とさっさと奥で作業に取り掛かり始めた。

「ちくしょうあのオヤジ覚えてるよ」

「相変わらずソリが合わないな。孝一さんとお前」

「あんなジジイとソリあつたつてヤダよ」

圭介がブツブツ文句を言うのを聞きながら弘樹はカウンターに着いた。

因みに圭介はジジイジジイと言うが孝一はまだ36で、見た目はさらにもう少し若い。

今は早したかヒゲのお陰で年相応に見えるが。

「なあ弘樹。今からでも遅くねえから向いのイタリアン行かね？」

「ヤダ。俺今日、冷やし中華の気分。行きたいなら1人で行けば？」

「ひでーよ弘樹……」

「振られてやんの」

「うつせえぞ、ジジイ！ 奥さんに逃げられたあんたに言われたかねえ！」

うつせえのはお前もだ。

弘樹は呟いて溜息をついた。

圭介と一緒にここにくるといつもこうだ。

だから嫌なのに。

騒がしい昼食に、弘樹は早くも諦めのようなものを感じ始めた。

3・晴れのち雷

龍心を出ると、弘樹はタバコをふかしながら照りつけるような太陽に目を細めた。

「やっぱりまだ熱いな」

後から出てきた圭介が弘樹の横に並んで、独り言みたいにつぶやく。弘樹は圭介が来たのを確認すると、ゆっくりと歩き出した。

「にしてもさあ、今年の夏は何処にも行けなかったなあ」

「そうか？　俺は歩とかと結構遊んだけど」

「そおじゃなくてさあ！　俺とお前がだよ！」

隣で力説する圭介を弘樹は完璧に無視する。

「おいっ、弘樹！　そんなものは提案なんだけど」

「却下」

「まだ何も言っていないって」

「聞かなくても分かるっつーの！　どうせ週末どっか行こうってんだろ？　何年一緒に居ると思ってんだ」

「流石は弘樹」

「何かム力つく」

機嫌悪く弘樹が愚痴るのも構わず、圭介は「どこ行きたい？」と訪ねてくる。

どこまで図々しいんだ、こいつ。

「行くっていつてねえ」

「ダメ、決定だから」

笑って言う圭介に弘樹は溜息をつく。

「横暴だな。たくっ、奢りだからな」

「わーかってるって」

今にも鼻歌を歌いだしそんな圭介に弘樹は呆れながらも微笑した。

「たあだいまー」

「おー、おかえり歩」

「あれ？ 圭介？来てたんだ」

玄関で靴を脱いでいると顔を覗かせた圭介に歩は少し驚いてみせた。

「あの時以来じゃない？」

「ん？ ああ、そうだったな」

「もう決着はついたの？」

真剣に訪ねてくる歩に圭介は軽く笑って見せた。

「決着つつーか……開き直った感じかな」

「開き直ったって……ヒロは圭介が自分を好きなこと、受け入れたの？」

「んー……告って最初の方は流石に気まずかったけど。弘樹は俺を友達として大事だって言ったから。だったらアタックあるのみ？みたいな」

「タフだねえ」

感心する歩に圭介は苦笑した。

「おい、圭介。メシ……って歩？帰ってたのか」

「ただいまヒロ」

「歩、俺ちよつとメシ買いに行ってくるわ。コンビニの弁当でいいよな？」

「うん、いいよ。行つてらっしゃい」

「あつ、俺も行く！」

「いいって。コンビニくらい1人で行かせてくれ」

圭介の残念そうな顔に見送られて弘樹は部屋を出た。

九月でも流石に夜になると多少涼しい。

弘樹は徒歩五分ほどのコンビニを目指して、ブラブラと歩いていた。
(そういえば……)

すっかり忘れていたが、ちょうど一週間ほどまえにあのコンビニの前で出会ったおかしな男のことを思い出した。

「あいつ、誰だったんだ？ 人違いか？」

にしては、向こうはちゃんとこちらの名前を知っていた。
ありがちな名前だが、偶然……と言うことは無いだろう。

(昔の同級生とかか？)

しかし、ただの同級生と言うには、なんだか意味深な言い方だったようにも思う。

なんにしても、もう会うことも無いだろうから考えても仕方がない。
「やめよ」

ひとり呟いて、頭上を見上げると、綺麗な満月が煌煌と輝いていて
弘樹は何故かいい様のない不安を覚えた。

自動ドアをくぐって、弘樹は来慣れたコンビニに入った。

「いらつしゃいませー」

やる気なさげな定員の声を聞き流しながら、早速弁当を物色し始める。

（あーっと、歩はシャケ弁で圭介は唐揚げかな……俺はどうしょ）
じいっと弁当を見ながら、弘樹は唐揚げと海老フライのどちらかで迷った。

どちらも、あと一つだ。

「あー、迷う」

弘樹が弁当と睨みあっているつとふと横から伸びてきた手がひよい
つと海老フライ弁当をとった。

「あっ」

つられてとった主に視線を向けると、弘樹は動揺した。

「あんた……」

「なに、今度は俺の事覚えてんの？ 水沢」

弘樹の顔を見て海老フライ弁当を片手に、男はニヤリと笑った。

「……知らねえよ、あんたなんか」

男の小馬鹿にしたような笑い方に、弘樹はムツとして機嫌悪く言った。

「あつそ。まあ、期待はしてねえけど」

男は飄々と言った。

この間とは打って変わって男はジーンズにＴシャツというラフな格好だったが、それでもなぜか男が着るとかつこ良く見える。

それが、理不尽と知りながらも弘樹には何となくムカついた。

「ほんと誰なんだよあんた。なんで俺のこと知ってんの」

「さあ？　なんででしょうね？」

「真面目に答えるよ」

からかう様に言う男に弘樹は益々不快感を示した。
なんだか気に入らないヤツ。

「名前は？」

「田中　太郎」

「だから真面目に答えるよ！」

弘樹が抑え気味に怒鳴ると、男は急に悲しそうな顔をした。
微かに目が潤んでいるような気すらする。

「ほんとなのに……やっぱりおかしいよな……俺の名前」

「えっ！　あ、いや、そんなことは……」

「いや、いいんだよ。分かっているから……」

男は顔を伏せて、暗い声音で呟いて自傷気味に笑った。

「あ、いや！　そんなつもりではなくてですね」

「ぷっ」

「え？」

オロオロしながら弘樹が弁解しようとしていると、顔を拭いていた男がもう耐え切れないとばかりに笑いだした。

「な、なんだよ！」

「もう我慢できねえ！　普通通信じるか？　しかもなんで敬語？　ハハッ、お前バカなの？」

「嘘ついたのかよ！ 信じらんねえ！ どこまで性根腐ってんだよ！」

「いや、まさか信じるとはおもわねえから。俺そんなに迫真の演技だった？」

バカにしたように言う男に弘樹はこめかみをピクピクさせて、あまりの怒りにここでぶん殴ってやろうかという考えが頭を過った。

（いや、ダメだ。ここは一応公衆の面前なんだ）

弘樹はなんとか怒りを抑えて、残った唐揚げ弁当をひっ掴むとレジで会計を済ませた。

そして、そのまま男の方を見ないようにして自動ドアを潜ろうとする。

「おい、水沢」

直前で呼び止められ、弘樹は反射的に立ち止まった。

「俺、唯川。唯川^{ゆいかわ} 聡志^{そうし}」

「きいてねえよっ！ わざわざ教えんなっ！」

弘樹は吐き捨てるように言って閉まりかけた自動ドアを潜った。

4・夕立ちな気持ち

「ただいまっ！」

ボタンつと勢い良く後ろ手でドアを閉めて、弘樹はムスツとむくれた顔で帰宅した。

リビングへと続くドアから顔を出した歩がそれを見て眉を寄せる。

「お帰りー……て、ヒロ？ どうしたの？ 怖い顔して」

「……別に。何でもねえ」

顔を背けて吐き捨てる様に言う。

弘樹は一瞬あの男のことを歩に話そうかとも思ったが、思い出して苛立ちが増しそうなのでさっさと忘れることにした。

「ま、それならいいけど。お弁当は？」

「ああ、ちゃんと買った。圭介は？」

「ベランダで電話してる」

歩はコンビニの袋からシャケ弁当を取り出した。

「ふーん」

弘樹も袋から唐揚げ弁当を取り出す。

すっかり腹が減ってしまった。

きつとお腹が空いているからイライラするんろう。

「電話、誰からなんだ？」

弘樹がベランダの方を見ながら言うと、歩は首を傾げた。

「さあ？ なんか揉めてるみたいだったけど」

「へえ。珍しい」

圭介は基本誰とでも打ち解けられるから、あまり誰かと揉めているのを見たことが無い。

孝一は例外だが。

なら電話は孝一だろうか？

いや、でも圭介と孝一はあの店以外では接点はなく、プライベートな付き合いは無いはずだ。

お互いの携帯番号なんて知らないはずだろう。

（ま、本人に聞けばいいか）

「あれ？ 弘樹帰ってたんだ」

ベランダの網戸を開けて戻ってきた圭介は少し疲れた顔をしていた。

「なんの電話だったんだよ？」

「ん？ ああ、まあ… ちょっとね」

苦笑して圭介はそれ以上何も言わなかった。

弘樹はその様子に思はず顔を顰めた。

「それより腹減ったあ。俺の弁当なに？」

「え？ ああ、唐揚げ。それで良かったよな？ リクエスト聞いて無かったから」

「流石は弘樹。俺の好み分かってるな」

「そりゃどうも」

嬉々として弁当を袋から取り出す姿にはさっきまでの疲れは見えなくて、弘樹はなんとなくホッとした。

弘樹と圭介は幼馴染であり、歩は従兄弟でしかも近所に住んでいたから、三人は小さい頃はいつも一緒だった。

中学までは同んなじ地元の学校に通い、高校は三人とも別々に進学した。

そのせいで、高校の間は少し疎遠になったりもしたがやはり時々会ったりしていたし、大学は皆同じ所に通って弘樹は2人のことを誰よりも分かっているつもりだった。

しかし、そうでは無かったのだと気づいたのは半年ほど前のことだった。

『俺、弘樹のこと好きなんだ』

いくら付き合いが長いからと言って、相手のことを全て理解できる筈など無かったのだ。

歩のことも、圭介のことも。

全て知る必要など無いと頭では分かっていたが圭介の告白を聞いたあと ”裏切られた” と思った。

衝撃が強すぎて動揺して歩には直ぐに悟られてしまったが、歩は平然と言つてのけたのだ。

「19年も一緒にいて、気づかない方がおかしいよ」と。

その言葉で弘樹は気づいた。

自分が感じている、傷ついた気持ちの何十倍、何百倍も圭介は苦しんだんじゃ無いだろうか？

弘樹は知っている。

自分の本心を隠すことの苦しさを。

それに恋愛感情かは別にしても圭介は弘樹にとって間違いなく大切な存在だ。

『ちよつと、考えさせてくれ。お前は俺の大事な友達なんだ』

「んじゃあな、弘樹。明日のデート忘れんなよ?」

「デート言っな。忘れてねえよ」

「じゃ、また明日な」

そう言っで玄関で靴を履いて不敵笑うと、圭介は出ていった。

「フーン……ヒロ、明日圭介とデートなんだ?」

いつのまにか横に立っていた歩が、探るようにこちらを見ていた。

「ちげーよ。遊ぶだけ」

「遊ぶって、なにして?」

「全部あいつが考えてくれるって」

「なんだ。やっぱりデートか」

「なんでだよ。違うって」

弘樹がムツとして言うのと、歩は一つ溜息をついた。

「そう思っでんのはヒロだけだよ」

そう言っでリビングに戻った歩に弘樹は小さく「なんだよ、歩のヤツ」と呟いたのだった。

4・夕立ちな気持ち（後書き）

圭介の告白については、番外みたいな感じで書きたいと思っています！

たぶん……（^^;;

5・台風注意報

(11:50……あと10分か)

圭介は携帯のディスプレイで時間を確認して、ソワソワとあたりを見回した。

ちょっと早く来過ぎただろうか？

一瞬そう思ったが、仕方ないだろう。

昨日の夜から楽しみで、一睡もしてないのだ。

寝る気にもなれなくて、約束の1時間前から弘樹が早目に来ても良いように待っている。

弘樹と出かけた事なんて腐るほどあるが、自分の気持ちを自覚した中学のころから2人で出かける時はこんな感じだ。

自分でも、遠足を待つ小学生みたいでおかしいとおもう。

けれど、仕方ないのだ。

(弘樹……早く来ねえかな)

自分ではどうしようもない。

圭介は途方もなく思える片思いに溜息をつきたくなったが、それでも弘樹が来るのを心待ちにしている自分に苦笑をもらした。

(あーあ。重傷だなあ)

「水沢……？」

圭介との待ち合わせ場所に向かう途中に聞き覚えのある声に呼ばれて弘樹は辺りを見回した。

「こっちこっち」

「黒部さん」

声のした方を見ると、会社の上司である黒部 修哉が長い足を組んでオープンカフェのテラスの席でパソコンを広げながら座っているのが目にはいった。

「やっぱり水沢か。もしかしたらそうかな、と思ったんだ」

黒部は先に勘定を済ませていたのか、テーブルの上のコーヒーはそのままに、ノートパソコンを折りたたむと席をたって店を出てきた。「ちようど帰るところだったんだ。その様子なら駅の方に行くんだろっ？ 一緒に行ってもいいかな」

弘樹が向かっていった方向は歩道で、先には駅しかない。

「はい、良いですよ。」

弘樹は快く了承した。

こんな所で黒部に出くわすなんて幸運だ。

弘樹は黒部と日頃比較的親しくしていて、弘樹は密かに黒部に憧れを抱いていた。

スラリと長い肢体に、整った顔。

仕事も出来るし、人柄も申し分ない。

まさに非の打ち所がないような人なのだ。

「黒部さんって家こっちじゃ無かったですね。 なんてあそこに

居たんですか？」

「え？ ああ、仕事でちょっと用があつてね。」

「凄いですね、日曜にまで」

「そうでもないよ」

黒部は弘樹が務める会社の社長の一人息子だ。

と言っても血のつながりは無く、子供がいない社長が引き取った養

子の子で、それは社内でも公然の事実であるが。

「僕なんて、施設から引き取って育てて貰ったんだからこれぐらいして当然なんだよ。まだまだ足りないくらいなんだから」

そう言つて、自嘲気味に苦笑する黒部に弘樹は思わず眉を寄せた。
なんだか……

「黒髪さん。そんな考え方、良くないですよ」

「え？」

キョトンとした黒部に弘樹はずいっと詰め寄った。

「俺は今、単純に黒部さんが凄いと思いました。黒部さんが頑張ったことを、養子だからっていうのを理由に無かった事にしないで下さい。それじゃ、いくらカンバっても意味ないじゃないですか。少しは自分を労わってくださいよ」

弘樹は思わず力説したあと、キョトンとした黒部と目が合つて、はつと我に返つて恥ずかしさのあまり赤面した。

それを見て、黒部がふつと笑いを漏らした。

「……ははっ！ 前から思つてただけど変わつてるよな、君」

「そう……ですか？」

なんだか釈然としない表情で弘樹は黙りこんだ。

「普通、会社の上司に説教がまさないとおもつけど」

「なっ……！ 説教なんて……！」

してない！ と言いかけて、果たしてそうだろうかと弘樹はまた黙りこんだ。

あれは、説教……だったのだろうか？

「ま、何にしても。僕は君のこと、気にいつちやつたみたいだ」

「は？ え？」

綺麗な顔に微笑を浮かべている黒部に、弘樹は何故かよからぬ予感を覚えた。

な、なんだ……？

「あ、僕こつちだから。水沢は？」

駅の改札前で、右側の階段を指指して黒部が言った。

「あ、俺は時計台のところで人待つんで」

「待ち合わせ？ 誰と？」

「あ、香坂です。香坂圭介。」

別に隠す必要もないかと弘樹は正直に言った。

同じ会社の同じ課なんだから、もちろん面識はあるはずだ。

「香坂……？ ああ、そういえば仲よかったっけ」

「はい。幼馴染なんで」

「へえ」

黒部は何故か興味深そうに2、3度頷いた。

そんな黒部に、弘樹は思わず首を傾げる。

「まあ、今日はこれで。また明日」

「あ、はい。また会社で」

手を降って改札をぬけて行った黒部を見送って、弘樹は腕時計を見た。

（おっ、時間五分钟前。ちょっと急ぐか）

いつも何故か早めに来ている圭介の顔を思い出して、弘樹は待ち合わせ場所へと駆け足気味に急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459u/>

天気予想

2011年7月31日06時38分発行